北鯖石中学校区

藤井の観音堂

藤井家の居城は、村の北方にあったというが、今は村人が相集まって開墾し、畑として麦や豆などを作っている。

村に信心深い老人がいた。或日この畑のすみの古井戸から怪しい光りが出ているのを見てせがれを呼んで、古井戸を探さしたところ、黄金作りの間におまつりしておいた所、或日山伏が来て、

「これこそ藤井城の城主の守り本尊である。もったいない事」

と　歎息したので、村の人と相はかって、一堂を作って安置した。

これが藤井の観音堂のはじまりという。

東城寺の子育鬼子母神

東城寺の子育鬼子母神は、開祖日華上人が上人の守り本尊として持参されたもので、檀信徒の信仰が非常に深かった。

天明三年四月のこと、江戸浅草に住む男、一千ケ寺詣りの旅すがら通りかかって、柏崎在の東城寺に一夜の宿を頼んで、わらじをぬいだ。この男の家では、家族が大病にかかって次々と死亡したので家族の追善供養のためと、全国の寺々を修行して回ることによって家族のものが救われるのでないかという発願で千箇寺詣りの旅であった。

ところがこの鬼子母神の功徳をまのあたりに見て悪心を起して、鬼子母神を盗み出して江戸へ持ち帰った。この鬼子母神を種にして一旗挙げるつもりであった。それなのに、何も彼もうまく行くどころではない、悪運が続くばかり、自分の悪心からだと悟り、天明五年六月、江戸から尊体を持参して東城寺へ戻って来た。お堂の前庭にあった梅の木に、御尊体と懺悔願書（ざんげがんしょ）を添えてお返しした。

当時の梅の古木は枯れたが、その若芽が今も残っている。

いえの山の稲荷さん

中田部落の東端、畔屋部落との境にあたるところに稲荷さんの山と呼ぶ小高い山がある。この山の木立の間に小さな社がある。これがいえの山の稲荷さんである。

この稲荷さんが子どもが大好きで、子どもを守ってくれるという。ここは子どもたちの天国で、大きな桜の木に登って猿のまねをしたり、かくれんぼ、ままごとはもちろんのこと、お堂の前の木像の狐の首に荒縄をつけて引きずったり、お腹がすけばお供え物を失敬したりして遊びほうける。

これではお稲荷さんに粗相でもあったら大変だと、お社に戸をたてたら、けがをしたり、風邪をひいたりする子がたくさんになって、あわてて戸をはずしたという。

また、火事や事変がありそうな夜「クワイ、クワイ」とたくさん鳴いて知らせる稲荷さんだった。

朝起きてみたら、いろりの縁から板の間、土台まで燃えて火が消

えているのに気がついた。新しい桶のたがが切れて、中の水がポトポト落ちて火を消したのだ。稲荷さんがたんと鳴いていられたがそれで火を消されたのだろうと村の人は油揚を供えたという。風当ての側の提灯はすっかり燃えたのにかやには火が移らなかった。この晩も激しく鳴かれた稲荷さんの声が聞えたという。

中田の一本松

中田の村はずれに（高野利八氏の宅地）に三百余年たった一老松があって、中田の一本松といって近隣に有名である。

幹は大人が四人でやっとだきかかえる程の大樹で、茨目のかたがり松の兄弟松と村人はいいはやし、米山の頂上からも望みできたという。

この松の下に祠があってその祠は、はやり目に霊験あらたかといわれ病に苦しむものはろうそくを持ってお参りに来た。

かって日清戦争の始まった時この松のしんが枯れて一見枯死したように見えたが、戦争が終ると若芽が青々と吹き出した。同じような現象が日露戦争の時にもあったので近在の人は「あれは戦争に行ったのさ」「戦争松」だという評判がたって有名になった。惜しいかな昭和四十四年師走積雪のために倒れて中田から名物が一つなくなった。

ちなみに高野利八氏の屋号を一本木と呼んでいる。

力蔵坊さん

中田に力蔵という力もちがあった。

主家に五年間、骨身を惜しまず奉公した。五年たって、けちんぼな主人は、力蔵をやめさせることにし

「おまえの持てるだけの米俵を、五年間奉公したお礼にくれてやる」と　言った。主人はせいぜい三俵ぐらいが、せきの山だと思って、そう言った。所が力蔵は、三間ばしごに米俵七俵しばりつけ、それを軽軽と持って

「じゃこれだけもらって行くぜ」

と言って出て行った。これを見た主人は、いまいましく思い、その後村人に、何だかだとある事ない事作りあげて、力蔵の悪口を言いふらした。

人のいい力蔵は、遂におこって、ある日主家に火を放った。えんえんともえあがる火を見て、力蔵の心は晴れる所か、だんだん自分のした事に責められていくのだった。そうしてそれから力蔵は村から見えなくなった。

力蔵は出家になろうと決心し、京都へ出て一心不乱に修行したのである。やがて十年たって、力蔵はりっぱな一人前の坊さんになって中田に帰って来た。

力蔵坊さんは、前非を悔い、中田に寺を建てようと決心した。力もちの力蔵坊さんは、一人で山にはいり、木をきり、それを運びだした。暗い中からまっ黒になって働いた。村の人達が見るに見かねて

「手伝うか」と申し出たが、力蔵坊さんは
「私の罪ほろぼしですから」
と言って、一切の手伝いを断わって、ようよう一堂を建て、持って来たえんま大王をおまつりしたという。これが今の中田のえんま堂だと言い伝いられている。

萬斉（ばんざい）先生

中田の大門さんは、萬斉先生という名医がおった。家の屋号の「惺々居」は、佐久間象山が命名されたものといわれ、広く天下の名士と親交があったという。
萬斉先生は、病気を診察したあと、必ず
「これはタンのせいだ」
と言われたという。
ある日、長屋さんの女中が、誤って石臼を落し、足の小指をつぶしたので、萬斉先生の治療を受けた。治療を終えた萬斉先生は、例の如く
「これはタンのせいだ」
と　言われた。女中は　けげんな顔をして
「足の指をつぶしたのに、なぜタンのせいか」と問うと　萬斉先生は、
「ゆだんというタンのせいじゃ」
と　答えられたという。
又ある時　女衆がくどき話をしているのを見て、萬斉先生は、次のようにうたって、さとされたという。

聞きたがる子が　聞かせたながる
ながるその子が　又聞きたがる
とかくうき世は　順々業

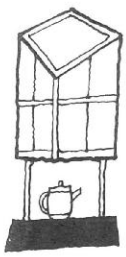
ジンスケ爺さん

中田の原に、ジンスケという爺さんがいた。
ある秋　比角村の小倉山の郷倉へ　年貢米を納めに行った時である。既に中田から大勢の人が集まっていて、容易に自分の番が来そうになかった。一人で留守居をしている母親が心配になってきたジンスケは、つと門に出て大声で
「ありゃ火事でないかな　中田の空の方が変だぞ」
と　どなりました。居合わせた人々が
「火事はどこだ」
と　列をはなれて　大騒ぎしているひまに、
「中田のジンスケでございます。年貢米をどうぞ。」
と言って差し出し、早々と用事をすませて帰村したという。

おじやなぎ・こじやなぎ

畔屋と山潤の境の沢に、おじやなぎ・こじやなぎという沢があって、おじやなぎには大蛇、こじやなぎには大蛇の子供が住んでいて、

山潤峠を越えて、畔屋に来るならず者を苦しめていた。
決して善人には　おそいかからなかったという。後附近に東城寺が建立されてから、この親子の大蛇は、どこへ行ったのか、姿を見たものはないという。

畔屋の元諏訪社

畔屋の元諏訪社は、宮島政太郎さんの祖先がこの地に移住して来た時に、招請した神様である。
畔屋地内の神社が合併された時、宮島氏の夢枕に神様があらわれて
「わしは一人で静かにいたいから、別に祭れ　場所は　私が道をつけておいたから」
と　言われた。
ふしぎに思い　朝見わたしたら　田んぼの中に白をごろまかした様な道があった。道は迎向の大けやきの下でとまっていたので、神のお告げ通りそこに元諏訪社をたてたという。
この神様は火防の神といわれ、この神社の見える地所からは、一度も火事はでなかったという。